TRAFFIC ADVICE ★交通安全活動をサポートする

●交通安全を考える～安全教育と企業責任～

'07トラフィック・セーフティ・フォーラムin浜松

11月2日、「'07トラフィック・セーフティ・フォーラムin浜松」が交通教育センターレインボー浜名湖で開催された（主催：交通教育センターレインボー浜名湖・交通教育センターレインボー浜松）。テーマは「交通安全を考える～安全教育と企業責任～」。

最初は、小川和久・広島国際大学心理科学部准教授による基調講演Ⅰ「安全教育とマネジメント」。交通行動モデルの階層的アプローチについて解説し、いろいろなことを学びながら安全行動の質を高めていく努力が必要と説明。また、ドライビングシミュレーターを使った教育を紹介。学習内容や習熟過程に応じて、教育手法をインストラクションからコーチングへと使い分けることが大切と述べた。

企業の交通安全教育の事例が紹介された

低μ路（すべりやすい路面）ブレーキ体験

基調講演Ⅱは、堀内武徳・堀内経営研究事務所所長による「道路交通法改正と企業責任」。堀内氏は、貨物輸送業務に関わる法規制や管理者の責任について解説。また、会社としての方針を明確にし、個人が目標を立て、その目標を細かく管理することでドライバーの意識と行動が変化した事例を紹介した。

続いて企業の事例発表。松沢利幸・生活協同組合コープながの総合企画室担当課長安全推進担当が、事故報告などの安全運転体制や安全運転研修の内容、飲酒運転撲滅の取組みを紹介した。

最後に、総括質疑が行われ、従業員へのアルコール測定導入による意識変化などについて質問が出され、交通事故防止に向けた意見交換が活発に行われた。

フォーラムに先立ち、午前中には視察体験会が行われ、参加者が反応ブレーキや低μ路（すべりやすい路面）ブレーキを体験した。また、フォーラムの休憩時間には、エアバッグ展開のデモンストレーションや自転車シミュレーターの展示が行われ参加者の関心を集めた。

堀内武徳・堀内経営研究事務所所長

小川和久・広島国際大学心理科学部准教授

●交通安全を考える―交通教育の進め方―

'07トラフィック・セーフティ・フォーラムin鈴鹿

11月6日には、鈴鹿サーキット交通教育センターにて「'07トラフィック・セーフティ・フォーラムin鈴鹿」が行われた（主催：（株）モビリティランド鈴鹿サーキット交通教育センター）。テーマは、「交通教育の進め方」。

午前中は、矢橋昇・交通・社会・教育問題研究矢橋昇事務所所長による基調講演「交通安全教育の方向性」。運転者教育では、運転者としての自覚の養成、他者配慮という考え方の育成、基本的ルールを守る態度の養成、安全運転能力の育成が重要と説いた。また、指導の際には相手に考えさせることが大切と述べた。

「交通安全教育の方向性」について講演が行われた

矢橋昇・矢橋昇事務所所長

午後の特別講演の講師は、太田博雄・東北工業大学工学部教授と、長江啓泰・日本大学名誉教授。太田氏は「正しい自己理解と安全運転―自己評価技能教育―」というテーマで講演。ドライバーは、実際より自分の運転行動を高く評価する傾向があるので、過剰な自己評価を修正するため、映像などで自分の姿をフィードバックする自己評価技能トレーニングの重要性を伝えた。また、コーチング技法による気づきを支援する工夫が求められると語った。

長江氏は、「相手の立場に立った話し方」というテーマで講演。納得できなければ、態度変容をもたらすことができない。相手を理解した上で教育をすすめ、相手がわかる言葉や態度でコミュニケーションを図ることの大切さを述べた。また、問題意識を持たせ解決策を見つけさせることや、相手の長所をひきだす教育が必要であると結んだ。

講演の合間には、会場に展示された自転車シミュレーターを実際に体験する参加者もみられた。また、午後の特別講演の時間帯には実技体験会も開催。今年8月に新しく生まれ変わった研修コースで「運転習慣チェックプログラム」「安全デバイス」「エコドライブ」の体験や、「多発事故対応プログラム」のデモンストレーションが実施され、新しい教育プログラムを参加者が体験した。

新しい教育プログラムを参加者が体験した

NEWS REVIEW

●第27回交通安全シンポジウム

飲酒運転の根絶を目指して―家庭・職場・地域の果たす役割

11月14日、栃木県総合文化センター（栃木県宇都宮市）にて第27回交通安全シンポジウム（主催：内閣府、栃木県、宇都宮市）が開催された。テーマは「飲酒運転の根絶を目指して―家庭・職場・地域の果たす役割」。

開会式の後、まず、柿岡健三・栃木県警察本部交通部長による基調報告、鈴木由紀生・愛国学園大学教授 茨城大学名誉教授による基調講演が行われた。続くパネルディスカッション「飲酒運転の根絶を目指して」では、鈴木由紀生氏をコーディネーターに、石井良幸・埼玉西濃運輸（株）代表取締役社長、岡村和子・警察庁科学警察研究所主任研究官、鈴木亜久里・SUPER AGURI F1 TEAM代表、和氣みち子・飲酒運転被害者遺族（社）被害者支援センターとちぎ事務局長の4名がパネリストとして参加。「飲酒」と「運転」を切り離してそれぞれを上手に楽しむこと、家庭・地域・職場で飲酒運転根絶に向け協力して取り組んでいくことなどを確認した。

●ふじのくに交通安全県民フェア

子どもから高齢者まで交通安全を身近にとらえるフェア

11月23日、24日の両日、ツインメッセ静岡（静岡県静岡市）にてふじのくに交通安全県民フェア（主催：静岡県交通安全県民フェア実行委員会）が開催された。

この催しでは、会場に最新の安全装備を搭載したクルマや安全システムが展示・紹介されたほか、交通安全体験コーナーやキャラクターショーなど大人から子どもまで楽しめる様々な交通安全イベントが行われた。

会場の一角には、Hondaドライビングシミュレーター、ライディングトレーナー、自転車シミュレーター等が展示され、多くの人で賑わった。

交通安全活動を広げる SAFETY REPO

●（株）今仙電機製作所

子どもたちへの自転車教育を通じて、地域に貢献する

（株）今仙電機製作所（愛知県犬山市）は、自動車用のランプやシートアジャスタ（シートの調整機構）などを製造する会社である。今秋、同社の各部署を代表する従業員の有志で構成される「交通安全友の会（以下、友の会）」が地域貢献の一環として、子どもへの自転車教育を始めた。友の会会長である赤坂徳博・総務部環境安全課課長は「今までは主に従業員を対象に交通安全の指導を行ってきましたが、この活動を地域全体に広げていこうと考えました。子どもへの自転車教育はその第一歩です」と話す。友の会には自転車教育に関するノウハウがなかったため、鈴鹿モビリティ研究会（3面注釈参照）の協力を得て、赤坂課長を含めた友の会のメンバー全員（10名）が「あやとりぃ　自転車教室」（3面注釈参照）のトレーニングマニュアルを学んだという。「鈴鹿モビリティ研究会のインストラクターによる指導を体験するだけでなく、インストラクターが鈴鹿市内の小学校で行った自転車教室も見学しました。自転車の安全な乗り方や、子どもに話しかける時は目線を子どもと同じ高さにするなど、指導する上で参考になる話ばかりでした」。

一人ひとりの運転を見て、適切なアドバイスを行う友の会のメンバー

見通しの悪い交差点での安全確認の大切さを指導

「第1回交通安全友の会　自転車教室」は、10月20日午前9時から11時まで同社の敷地内を利用して開催され、従業員の子ども16名が参加した。

最初は自転車の点検から。子どもたちに自分の自転車に乗ってもらい、子どもたちの体格に合っているかを確認。合っていなければ、友の会のメンバーがサドルやハンドルの高さを適切な位置に調整する。さらに、ブレーキの効き具合も一人ひとりチェックしていく。

その後、実技に入り、子どもたちはブレーキ練習、パイロンスラロームに取り組んだ。最後は、見通しの悪い交差点の通過。コース上にはダンボール箱を積み上げて、見通しの悪い交差点が作り出されている。子どもたちがこの交差点にさしかかると、「交差点の手前では止まりましょう。そして、自転車を降りて右、左、右、後ろの安全を確認してから、自転車を押して交差点を渡ろう」と友の会のメンバーがアドバイスした。

「従業員の子どもを対象にした自転車教室だけでなく、私たちが地元の幼稚園や小学校などに出向いて、『あやとりぃ』などの教材を活用しての指導も検討しています」と、赤坂課長は今後の抱負を語る。

パイロンスラロームに取り組む子ども

活動短信 ●交通教育センター　11月

アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ
TEL 0285(64)0100
●企業／[二輪]＝NTT－東日本神奈川、日信工業、ユタカ技研、オートテクニックジャパン、ホンダアクセス、本田技術研究所二輪開発センター、本田技研工業
[四輪]＝NTTファシリティーズ東北支店、関東電気保安協会、東北電力、首都高速道路パトロール、三菱電機ビルテクノサービス
●官公庁／[二輪]＝栃木県警察本部、栃木県庁、宇都宮市役所、宇都宮市教育委員会、栃木県警察学校